

記者会見質疑応答

日時 令和8年9月16日（水）午前10時から

場所 第2応接室

出席者 ○市 側：市長、町田副市長、総合政策部長、環境衛生部長、産業経済部次長

○記者側：9社11名参加

発表内容 ・経済産業省「GX戦略地域（第1弾）」の認定について

・レッドイーグルス北海道アジアリーグアイスホッケー2026-2027シーズンについて

・苫小牧をもっと誇れるまちへについて

<案件について>

○苫小牧民報社

レッドイーグルス北海道の応援部分と誇れるまちへについて、どちらも意識醸成などが狙いだと思いますが、ハード的には新たに何かできたり、キャッチフレーズができたりするのでしょうか。

■市長

レッドイーグルスにつきましては、節目の年に本市もチームもありますので、より一層アイスホッケーというものを盛り上げていく、あるいはレッドイーグルス北海道そのものを応援するという機運を高めたいということで、様々取り組ませていただいておりますし、開幕戦を終えたところですので今日この場で改めて発信をさせていただいております。

苫小牧をもっと誇れるまちへということにつきましては、今年度4月1日から新しい組織を立ち上げましてシティプロモーション課を作り、これからシティプロモーション、シビックプライド、これはもう表裏一体だと思っておりますがそれを進めていく様々な検討をしております。

例えば今後、市民の皆さん、あるいは市外の皆さんに苫小牧と言えば何かというのをわかりやすく表現するようなものを作り上げたいと思っておりますし、その作業の一つがあなたの街でミーティングの中で私から市民の皆さんにプレゼンをさせていただいている内容とアンケート調査でございます。

ハード的なものは特にはないのですが、苫小牧といえばこういうものがある、こういういい所がある、そのようなものを対外的に発信するためにはまず市民の皆さん、あるいは市役所にいる我々もしっかりと魅力や誇りというものを認識することが大事だということで、今いろいろと協議を内外でさせていただいておりますので、そのようなことで今回記者会見の場でお話をさせていただいたということでございます。

○苦小牧民報社

かつて子どもの発案でとまチョップができましたが、そのようなものが新たにできるというものとは違うのでしょうか。

■市長

先ほどシップという言葉を申し上げましたが苦小牧は港町、これは先人たちが本当に様々な苦勞を乗り越えて世界初の掘り込み式港を作っていただいたそこに寄港する船ということもありますし、あるいは先ほど申し上げた何々シップという言葉がありますが市民の絆、あるいは精神的な支えだとか誇りだとかそういうものを象徴する掛け声といいますか言葉みたいなものもこれから作っていったらと思っております。

○北海道新聞社

苦小牧をもっと誇れるまちへについてですが、この中でアンケートをあなたの街でミーティングの中で取ると書いてあったのですが、アンケートを取って具体的にどのように活用していくのか、加えて苦小牧といえどという所をわかりやすく発信していきたいとおっしゃられましたが、市民の方に聞くのも重要だと思いますが、全国的に苦小牧が認知されているかを調べるのであれば、市外や道外の方にも調査をした方がいいと思うのですがそのような予定はないのでしょうか。

また、掛け声みたいなものを作っていきたいということですが、これはいつまでにやるもので、このプロジェクトは市の政策の中でどのような位置づけにしているのかお伺いいたします。

■市長

例えばアメリカのニューヨーク市は“I Love New York”（アイ・ラブ・ニューヨーク）というフレーズとロゴを作っておりますが、第三者から見てその街を象徴する言葉やロゴを作ることが大事だと思っているのですが、既に苦小牧市のロゴはありますので今後活用していきながら新たな苦小牧を一言で表すようなフレーズや言葉を見いだしていきたいと思っています。

ただ言葉を作ることはできるのですが、市民の皆さんの思いや心みみたいなものを詰め込んでいきたいと思っております、その辺の作業は今年度かけてやっていきたいとの思いから、あなたの街でミーティングでも私のプレゼンの項目に入れさせていただいております。

そういったものを受けてアンケートも皆さんに協力的に書いていただいております、複数回答可能にしていますので、集計した上でどういったフレーズがいいのか、苦小牧シップなどの象徴できるようなものを作っていき、これが最終的にシティプロモーションとして苦小牧とはこういうものだという様々な形で発信していくと思います。

パンフレットを作ったり、私がいろいろなところでトップセールスをしたりすると思いますが、そういうものを発信して市民の皆さんも共有していただけるようなことに最終的に繋がっていけばいいかなと思っています。

○北海道新聞社

先ほど質問した部分で今年度から始めるということですが、いつまでにという部分と市外の方へのアンケートなどは行わないのかという2点を改めて伺います。

■市長

市外の方へのアンケート等は今の現段階では考えていませんが、今後考えていきたいと思っています。

スケジュール的には先ほど申し上げたとおり、今年度かけて作り上げていきたいと思っています。

○北海道新聞社

このことについて改めて予算を計上したりする予定は今のところないのでしょうか。

■市長

場合によってはあり得るかもしれませんが、策定作業は昨年度から取り組んでおりまして、既に事業費用を計上した中で進めてきております。

○朝日新聞社

前岩倉市長さんも含めて金澤市長も学生時代にアイスホッケーに没頭されていたと伺っておりますが、それを踏まえて何か今日の資料を見ると非常にありきたりな表現といえますか、プレーヤーであった市長自身のアイスホッケーに対する思いやチームが100年あるいはスポーツ都市宣言から60年の市にとってこのチームはどういう重要性であるかという市長自身の言葉で熱っぽくもう少し話していただけないでしょうか。

誇れるまちへの裏面の資料の中に北海道一丸で2連覇に進むこのチームに市長の言葉を載せませんかというお誘いでもあるのですが、改めてレッドイーグルスだけではなくて、アイスホッケーという競技そのものを北海道だけではなく全国に知っていただき、親しんでいただくために、氷都を標語する市の市長として自身の言葉で発信していただけないでしょうか。

■市長

日本におけるアイスホッケーを支えているのが苫小牧市だと私は考えており、現にnepiaアイスアリーナは長らくナショナルトレーニングセンターに指定されまして、各カテゴリ

一の男女含めた代表の合宿をする場になっており、オリンピック予選も度々ここで開催されておりますし、アイスホッケーを基軸として移住促進プログラムというものも市が毎年行っておりますが、プログラムに沿って移住した方もいればそういったものに関わらず苦小牧が日本全国で見てもアイスホッケー環境としては一番いい環境があると評価をいただいて、小学校あるいは中学校、高校、それぞれのカテゴリーで移住をしてアイスホッケーをしながら勉学に頑張る子供たちもたくさんいらっしゃいます。

ですから街としてアイスホッケータウンとしての存在をこれからもより強くアピールしていく必要があると思いますし、そういった環境作りも引き続き行っていきたいと思っております。

結果、先人たちの取り組みの中で、このアイスホッケータウンとして続けてきたこの苦小牧がより一層アイスホッケーを盛んにしていく原動力となって日本のアイスホッケーをしっかりと支えていくという形でやっていきたいと思っており、それをトップリーグで引っ張っていただいているのがレッドイーグルスさんでございますので、そういったレッドイーグルスとともにしっかりと盛り上げてまいりたいと考えております。

○朝日新聞社

シーズンが始まったばかりで初戦は3対0から逆転勝ち、2戦目は懐かしの王子製紙時代のユニフォームで臨んだのですが残念ながら延長負けという1勝1敗という状況なのですが、市長はこの2試合の状況をご覧になって元選手からの視線で今回のチームをどのように映ったのか、あるいは去年までのチームとどう違うとお感じになったのか伺います。

■市長

2試合見させていただきましたが、非常にエキサイティングで内容としてもいい試合だったと思っております。

高いレベルの方々ですので私が評価するものではありませんが、入場者数も初日は1600人、2日目は2700人という数でございましたので、特に2日目はほぼ満席に見えるような感じでありましたし、大変な盛り上がりでした。

やはりあのような形でアイスホッケーを通じて興奮と感動を与えられるというのはアイスホッケーの素晴らしさですし、レッドイーグルス北海道の魅力だと思っております。

昨シーズンと違うのは、外国人の助っ人が2人入っており、非常に活躍しておりますし、ルイッカ選手は得点もされましたので、こういった一つも今シーズンのレッドイーグルス北海道の魅力ではないかと思っております。

昨シーズンはこれ以上ない成績を収めましたので、監督、コーチ、選手もプレッシャーの中でこの2戦を終えたと思いますが、これからさらに勝利を積み重ねていただきたいと期待しています。

○朝日新聞社

資料や日程表を見ますと来年の 1 月、チームの発足からちょうど 100 年ぐらいの節目なのですが例年のチーム事情から言うと、この辺のアニャン戦が天王山なのかなと思うのですが、例えば冠ゲームまでとはいかなくても、市が後援なり協賛をして市民を巻き込んだバックアップで支援とかサポートは何かお考えなのでしょうか。

■市長

担当部長からお答えします。

■総合政策部長

現状では予定はないところです。チーム側に何か希望されるものがもしあるとしたらご相談に乗って何か市として貢献できることありましたらやりたいと思っていますし、もしそういったことでぜひ取り組むべきだという声も大きくなるのであれば、当然検討をしていかなければならないとは思っておりますけど、今現状では特に予定しているのではないということです。

○朝日新聞社

今回認定されなかった脱炭素電源活用型についてですが、国へのフィードバックをししっかりと精査しというのが、多分国から突きつけられた苫小牧市の地域への注文というか今後の課題だと思うのですが、これについて今後どのように精査して克服していくのかという方向性を示していただきたいのですが。

■市長

その点については国から明確に示されておりませんが、再生エネルギーを含めた脱炭素電源の確保をさらに進めていくことですか、対象エリアに立地が見込まれる企業の確度を高めていくことが重要ではないかと現段階では思っております。

いずれにしても国や北海道としっかりとコミュニケーションを取りながら、関係者と協議を進めて計画をより磨き上げていくことを継続していくことが肝要かと思っております。

○室蘭民報社

GX の関係で今回、データセンター集積型というのが認定されたということですが、申請したのはデータセンター集積型と脱炭素電源活用型の二つを申請したということによろしいでしょうか。

■市長

はい。

○室蘭民報社

データセンター集積型に認定されたということで経産省の資料を拝見しますと設備投資の後押しや電流系統の先行整備等々で産業クラスターの形成を後押して伴走していくとあるのですが、苫小牧市として環境配慮型のデータセンターの集積を目指していくということですが、具体的に現状開業予定のところはソフトバンクさんがありますが、その他の事業所様に企業セールスをしていくと思うのですが、どのような形でセールスをしていくのか教えてください。

■市長

まず今回の認定により直ちにデータセンターの建設が決まるということではございませんが、国からGX戦略地域として位置づけられましたことで本市がデータセンター集積の有力な拠点として国や北海道、関係事業者と連携しながら電力あるいは通信など、いわゆる誘致に必要なインフラ整備を一体的に進めていくための大きな土台ができたものと考えております。

今後は具体的な事業者の誘致やインフラ整備に向けた協議を進めていき、実際の投資や立地に繋げていくことが重要だと考えております。

データセンター誘致集積にあたっては、何よりも大量の電力を安定的に供給できる環境と脱炭素化が重要だと思っております。

今後はそういった道内の豊富な再生可能エネルギーですとか、将来的な脱炭素電源を本市の広大な工業用地への効率的な供給をするための送電網ですとか、電力供給の仕組みについて国や北海道電力事業者と連携して検討を進めていきたいと考えております。

あとは冷涼な気候を持つとか港湾・空港があると、こういった立地の特性も国内外の事業者積極的に発信をして電力通信などのハード面と誘致あるいは事業支援などのソフト面の両面から集積に向けた環境整備を進めていきたいと考えております。

○室蘭民報社

苫小牧をもっと誇れるまちへはプロモーションの部分だと思いますが、具体的にそのことをすることによって何を目標しているのか。

例えば苫小牧のブランド力を上げたいということなのか、それとも苫小牧の魅力を感じていただいて移住者とか関係人口をもっと増やしたいというところを目指しているのか、何を目標してこの取り組みをやるのかを具体的に教えていただければと思います。

■市長

狙いは先ほど申し上げましたシティプロモーションです。そのシティプロモーションの狙いというのは、定住人口はもちろんですが交流人口の増や企業の進出を促すなど、結果導けることが私は目的だと思っております。

そのために苫小牧市の魅力とは何なのか、あるいは誇れるものは何なのか、来たらどんないいことがあるのか、美味しい食べ物は何なのか、そういったものをしっかりと発信をしていくと同時に苫小牧市を象徴するフレーズですとか、そういったものを作っていくことが大事だと思っておりますのでこの取り組みを進めております。

○建設新聞社

GX 戦略の部分で何点かお願いします。説明資料の中ですと、データセンター集積型は選ばれて、脱炭素電源活用型が選ばれなかったということで、それぞれ選ばれた理由と選ばれなかった理由については国や申請元となっている北海道の方からこういうところが良かった駄目だったというような明確なものは示されているのでしょうか。

■市長

担当次長からお答えします。

■産業経済部次長

現時点で具体的なものは示されておりましたが、今後示されてくるものと思っております。

○建設新聞社

先ほど朝日新聞社さんの質問の回答として脱炭素電源活用が選ばれなかったので、そのフィードバックの中で企業の確度を高めたいと主張されていましたが、企業の確度を高めるといのはどのようなニュアンスなのか伺います。

■市長

企業さんのこういった進出や今回の脱炭素電源活用型についてのいろいろな理解が必要になってくると思うので、そういったものが国や北海道と連携しながら事業者、関係者とコミュニケーションを図っていくことが大事だと思っています。

○建設新聞社

要するに市とデータセンター事業者の間での調整連絡とかそういったものがより必要になるというニュアンスということですか。

■市長

そうですね。情報収集あるいは発信も含めてです。

○建設新聞社

選ばれなかった脱炭素電源活用について、説明資料の中だと半導体サプライチェーンの構築はエネルギー基盤の観点からも重要な取り組みで今後認定を目指すというような、要するにこれは国や北海道において選ばれなかったことがこういうところで残念だったというような説明になっていると思いますが、もし具体的に単純に苫小牧が選ばれなかったことに対しての苫小牧から見たときの損失とまでは言わないですが、残念な懸念点などがあればお願いします。

■市長

国から明確に今回選ばれなかったことについての理由が示されているわけではありませんで、そこについては何とも言えないのですが、先ほどの繰り返しになりますが再生エネルギーを含めた脱炭素電源の確保をさらに進めていくことや対象エリアにその立地が見込まれる企業の確保と先ほどもお話した点を詰めていくことが今後大事だと思います。

それとともにやはり国や北海道とのコミュニケーションを取って計画の磨き上げを継続していくことだと思っております。

○北海道新聞社

GX 戦略地域制度のデータセンター集積型に選ばれたことについてお伺いをいたしますが、多くの市民の皆様にとって大変喜ばしいことだと思いますが、市民の皆さんが関心あるのがこれによって将来的に我々にとってどのような恩恵があるのかというような点だと思うのですが、その辺をもう少し市長からアピールしていただけますでしょうか。

■市長

苫小牧市もゼロカーボンの街を目指していくことは、前岩倉市長も宣言をしてずっと進めてきております。

今回、民間の様々な動きがある一方でデータセンター集積型の部分が選ばれたということですのでさらにゼロカーボン、GX と DX が一緒に進んでいくということの期待感がより高まったものと考えております。

やはり GX と DX はセットですので、流れがこの苫小牧で進むことが、北海道全体の利益になっていくと思いますけれども、先ほどのシビックプライドではありませんが、そういった先進的な取り組みが苫小牧で進んでいくということもぜひ市民の皆様にはご理解をいただきたいし、それによる経済発展や地域経済の活性化にも繋がってほしいと大きな期待をしています。

○北海道新聞社

シビックプライドの件で事務的な確認なのですが、これはキャッチフレーズを作るといような形に言い換えても差し支えはないでしょうか。

■市長

キャッチフレーズももちろん考えておりますし、市民の皆さんの気持ちが入っていくような作業を今させていただいていると思っております。

○北海道新聞社

イメージとしては何か一つのキャッチフレーズを作るというよりも、先ほどおっしゃられた“I Love New York”じゃないですけども、そのような感じのキャッチフレーズが一つできるのか、それとも何か他にも文言とか付け加えたりするのかというようなイメージなのか教えてください。

■市長

キャッチフレーズですので、短くそこに込められている意味をできるだけ明確に伝えられるようなフレーズを考えており、あまり長いものは考えておりませんが先ほど申し上げましたけれども、先人たちが作ってくれた苫小牧港はチャレンジ精神のもとに築き上げた港ですのでそういうものと絡めて考えるとやはり船のシップと、様々な絆だとか、精神面の誇りだとかいうものを表すシップという言葉、この辺りをうまく融合させて、例えば苫小牧シップという掛け声だとかも今後考えられると思っておりますが、そのあたりはアンケート調査等々含めてこれから進めて固めたいと思っております。

○朝日新聞社

GX の関係で、これから苫小牧市が認定を目指す脱炭素電源活用型で今回認定された 8 地域を見ますと、秋田県を除いて全部、原発の UPZ 圏内にある自治体がほとんどなのですが、苫小牧市は特に原発関連とは違う方向性で認定を目指すという理解でよろしいでしょうか。

■市長

国から明確に示されていけませんので国の判断についてはわかりかねますが、我々としては原発の部分をどう考えていくかというのは整理していきたいと思っております。

<その他 案件以外について>

○紙の街の小さな新聞社ひらく

苫小牧市が三沢地区土地利用方針の廃止方針を示していますけれども、つい先般、美々川エリア付近でパーキング施設の看板が設置されて、さらにトレーラー上になるのですがコンテナも設置されていました。

まだ営業開始にはなっていないようなのですが、市長としてはこのエリアの方針は、自然と産業とのバランスを図る中で総合的に判断をされたとして見送られた経緯があると思い

ます。

その中で、駐車場施設の設置はまだ一つですが、これが広がっていく可能性もなきにしもあらずではないかと懸念している声が寄せられたもので、市長のこうした取り組みへの認識をお伺いいたします。

■市長

市街化調整区域につきましては、建物などの建築が伴わない駐車場などの整備を行うこと自体は可能となっております。

このような中で、環境面では苫小牧市自然環境保全条例に基づいた許可申請において指導などを行っておりますけれども、美々川周辺における整備につきましては、有識者等の意見を伺った上で影響を軽減するため川沿いに樹木や緑地を残していただくように市としては要請を行っているところでございます。

○紙の街の小さな新聞社ひらく

この市街化調整区域なのですが、川沿いギリギリまで伐採されてしまった状態で、入口の門の部分には当該開発行為において樹木植栽による緑化復元が必要ですよという文言が掲げられていたのですが、市としては企業さんといいますか茨城県の企業の名前になってしまったけれども、企業とのやり取りでお話できる範囲でこういった働きかけを行っているのかという部分をお伺いいたします。

■市長

担当部長からお答えします。

■環境衛生部長

許可は苫小牧市の自然環境保全条例に基づいたやり取りを業者とはしていますので、その中で緑化は復元するようにという指導をしているところです。

○紙の街の小さな新聞社ひらく

指導が叶うまでは営業はできないという状態なのでしょうか。

■環境衛生部長

許可条件になっていますので、それができるまでは営業できないということになります。

○HTB

IRの関連についてお伺いいたしますが、IRの計画について苫小牧市として意欲は示していたと思いますが、北海道との検討の状況というのは今現段階でどのような進捗なのでし

ようか。

■市長

全て申し上げることはできませんが、担当レベルあるいは私も道庁とはいろいろとやり取りをさせていただいております、今回の考え方の案を示されたことを受けましてより一層、道庁サイドとは協議を進めていながら私も公約に IR を入れておりますので、その実現に向けてスピード感を持って取り組んでいきたいと考えております。

○HTB

2019 年に断念されたときは自然環境への懸念の声があったと思いますが、その点について今後どのように向き合っていくのか、また、今の時点でどのようなお考えを持たれているのか伺います。

■市長

当時は環境に対する懸念があったと思いますが、環境アセス等を含めて一旦置いているようなところもございますから、今回改めて北海道の方で申請するにあたって懸念される点があればその点については我々としてもしっかり連携をとりながら、ハードルを越えていけるように準備していきたいと考えております。

○HTB

今の時点での市長自身の IR 誘致への意気込みはどういった感じでしょうか。

■市長

私としては必ず実現したいと思っております。今まさにチャンスが来ているものと思いますので 2019 年の時点とかなり物価高騰の関係等がありまして、建築費用や経済効果が期待される納付金等々を含めて数字が変わっている点がございますので、その点は我々もまた再度調査をした上で苫小牧市としてどの程度効果を見込んでいるのか作ってこうと考えておりますけれども、そういったものをしっかりと市民の皆さんにメリットもデメリットも示した上で、できる限り市民道民の皆さんの理解を得て IR 実現を何としても成し遂げたいと考えております。

○HTB

駅前の再開発について、ファイターズ 2 軍の誘致で延期することになっていたと思うのですが、苫小牧駅の再整備に向けた計画の策定の公表はタイミング的にいつ頃になりそうか現段階で公表できることはありますでしょうか。

■市長

副市長からお答えします。

■町田副市長

駅前につきましては、ご指摘のあったとおりファイターズの誘致の関係で立ち止まっていた状況でした。

計画につきましては今年度中に作って市民の皆様に公表したいと思っています。

今後スピード感を持って取り組んでいきますが、なかなか駅前が動いている姿が見えないとの市民の声もいただいていますので、そこが見えるように何とか我々としてはスピード感を持って取り組みたいと思っています。

○HTB

具体的に今どの段階まで進んでいるかと明かせる範囲でお願いします。

■町田副市長

駅前につきましてはパートナー事業者の選定が終わっていますので、パートナー事業者と今計画を作っている段階でございます。

計画ができた段階で駅前の建物の解体というベースに入ってくるのかなという感じで今考えているところでございます。

○HTB

駅前の解体はいつ頃になるのでしょうか。

■町田副市長

できれば来年度中に着手したいという考えを現時点では持っています。

○STV

IRについて伺いますが、2019年内に計画されていたところが環境問題などいろいろ出てきましたけれども、現時点でこの辺りを候補にしたいですとか、そういった意見交換などが行われているのでしょうか。

■市長

事務レベルでは道庁の方と様々なやり取りさせていただいておりますけども、なかなかこの場で詳細を申し上げることはできませんが、我々としては苫小牧に候補地を選定していただきたいと思っています。

○STV

重複しても結構なのですが、改めて市として IR に関してどのようなことをこれから PR していきたいとお考えでしょうか。

■市長

まずは経済効果や税収効果が非常に期待できるものがありますから、そういったところを市民の皆さん、あるいは道民の皆さんにもご理解をいただきたいと思います。

一方でデメリットを指摘されていることもございますから、そういったところに対する対策もしっかりと示していくことが大事だと思っております。

○北海道新聞社

JR 北海道のいわゆる黄色線区についてお伺いいたします。JR 側が上下分離方式を撤回する方針であるということが複数の報道で報じられていますが、本日この後 JR の記者会見も予定されていますが会見で上下分離の方針の撤回が示されるというような前提で市長の受けとめをお伺いできればと思います。

■市長

記者会見をまだ聞いておりませんので、私の方からコメントは控えたいと思いますけれども、いずれにしても JR の路線維持あるいは道民の足をしっかりと守るための協議が今後しっかり進んでいくことに期待しております。

○北海道新聞社

IR についてこれまで植苗が一番有望かとは思われますが、環境影響への懸念があると思うのですが、特に最近は大沼川との関係であるとか環境影響の市民の関心も高まっているのですが、その環境影響への懸念をどうやって解消していくのか、もし道筋みたいなものがあれば教えてください。

■市長

これまでも環境アセス等は調査した部分がございますから、足りなければいろいろと調査をし、合意形成に取り組んでいかなければいけないと思っております。

○北海道新聞社

今週 20 日から 23 日に韓国出張の予定が入っていますが、差し支えなければ目的を教えてください。

■市長

詳細はこの場では申し上げられないのですが、経済発展するものとして韓国出張をして

くる予定になっております。

○北海道新聞社

IR の関係でシンガポールや北米へ視察に行かれると思いますが、日程はいつごろになりますでしょうか。

■市長

日程はまだ確定しておりませんが、予定どおりシンガポールに視察に行くようになっております。

○北海道新聞社

GX と別の特区の関係ですが、作業員の不足に関して国家戦略特区の認定を受けるということで北海道と市の方で申請をしていたと思いますが、現在の進捗状況と、今のところどのような見込みなのか、併せて市長の期待感なども含めて改めて伺います。

■市長

国家戦略特区については今後 GX 管理プロジェクト等の進展に伴い、必要となる短期作業員の宿泊場所の確保に向けまして仮設宿舎の建設における基準緩和について 3 月 27 日に北海道を通じまして国に申請を行い、国、北海道との協議を重ねております。

現在は仮設宿舎の建設が可能となる方向で一定の方向性を示すことができるように最終調整に入っている段階でございます。

本件については方向性が定まり次第、しかるべきタイミングでお知らせしたいと考えております。

○北海道新聞社

時期的にはいつぐらいまでに国と調整しているのでしょうか。

■市長

今の時点では申し上げられないので方向性が定まり次第、公表したいと考えております。

○北海道新聞社

市長として今回の特区の申請があるかないかで、苫小牧のまちづくりや都市としての企業立地関係の部分に大きく影響してくると思うのですが、今回認定されてもされなくてもどのように宿舎の確保に取り組んでいこうかという見込みなどがあれば教えてください。

■市長

見込みについては今申し上げられませんが、いずれにしてもこれに取り組んでいる意味は短期労働者の方々をしっかりと確保して受け皿となり、このプロジェクトが進む環境づくりをしていくことが目的ですので、その一助になるのが特区申請だと思って進めておりますが、仮にそれができなくてもしっかりとその受け皿となりうるような環境づくりは引き続き取り組んでいかなければならないと思っております。

○HTB

IR 関連で先日も北海道が基本的な考え方の改定案をまとめたり、道議会で議論が進む動きを見せていると思いますが、それに対しての市長の受け止めをお伺いします。

■市長

中身としては候補地については示されなかったわけですが、考え方の改定をするというのは北海道として進めていくという思いが込められているのではないのかと思いますので、これらの動きと連動して遅れることなくしっかりと IR 誘致実現に向けて取り組んでいきたいと思っております。